

昭和三十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和三十五年十二月十五日發行
（月一回、十五日發行）

（通第一四〇号）

続・池山先生廿三回忌記念号

慈光

第十二卷

第十一號

目次	
た　だ　念　仏	池山栄吉……………（1）
池山先生の追憶	永井一夫……………（6）
先師の御前に	北岡行男……………（7）
檜舞台に呼びあげられて	福本慶子……………（9）
池山先生の憶い出	島　　仁……………（12）
示現滅度拯濟無極	花田正夫……………（14）
一道忌に思　う	玉尾延忠……………（18）

ただ念仏

池山栄吉

去年（昭和十年）の秋の始め頃から、かねての持病が、時々発作的症状を伴うようになって、その趨勢が、寒くなるにつれてじり／＼と昂まつて行くのを覚えた。師走もなれば過ぎる頃になると、やがて迎える新しい年が、なんのことはない、高い山でもあるかのよう、しかも残る九合目からの匂配がいかにも急で、それを越す力がはたして未だ自分にあまざれているやら、我ながら覚束なく、思わず溜息のもれるのが常であつた。

が、そのうちどうやら年は越せたものの、病勢は一向退こうともしない。学校も休講して静養を専らとしていたがとう／＼正月の未から二月の初めにかけて重態に陥つてしまつた。

生死のほどもわからない、というよりは、十中の八九むつかしかろうと云う見方が支配して、家中が沖々たる憂愁の気配にうずもれていた。

自分も今度は駄目かと思つた。今夜はまだこうして息をしているが、あすの朝になると、もう眼が閉じてしまつてゐるのではないかと思つた。そうだ、息は一つしかなかつ

たのだと、つねには自分の氣附かないことに初めて氣附いたような氣がした。

しかし、まだ絶対に死ぬにきまつてるとまでは思わなかつた。

もし死んだら：あれやこれやを思えば名残りはつきないが、ままよ「俺にはただ念仏がある」病床の傍、見やすいところに、近角君筆の

大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮びぬれば、

至徳の風静かにして、衆禍の波転ず。即ち無明の

闇を破して、速に無量光明土に到る、云々

の譚録聖訓とある軸がかかつてゐる。

「即ち無明の闇を破す」が特に目を惹く。ここまでは現在として解すべきだと心証する。

歎異鈔のここかしこが、それからそれと浮んでくる。一文一句、假名一文字に至るまで、張り切つた迫力をもつて身に逼り、心に泌みる。長鯨の百川を吸うように、私がない、鈔の言葉が、私の全身心を呑み込んでしまふ。もし生きたら、幸に死線を越えたら……今現に体感しつ

つある此の味わいについて、今一度、有縁の人々と語りたい。これが私に残された唯一つの念願であつた。

死の横顔を横目に見ながら、病床上に呻吟してゐる間、いくたび『ただ念仏』と点頭かされたことであらう。

例えば、或時は熱の加減で、全身がたまらなく熱い……断つて置が、当時、私の生命をおびやかした病氣は急性腎臓炎で、この病氣はいろ／＼錯覚を惹き起すそうだ……すると、私は忽ち熱さに苦しめられる地獄にゐる。私ばかりではない、ほかにも大勢罪人がいて、皆もがき苦しんでゐる。併し私には『ただ念仏』がある、と心に叫ぶ。私は身体に苦熱を感じながら、心にはゆとりがあつて、恐らく顔にはほほえみの影がさしてゐたろう。私の苦しみは、ただ焦熱地獄の見学に伴う実験に外ならないからである。

また或時は、たまらない悪寒に襲われる。今度は寒さに責められる洞窟だ。ここにも罪人がう／＼ゐる。けれども私には『ただ念仏』がある。今は八寒地獄の視察中なのだ。案内者は『ただ念仏』だ。

また或時は、観察の方面をかえて、地上の人間の世界に遊ぶ。すると、情緒纏綿の愛執的生活やら、名聞利養の打算的生活やら、さまざまの生活の成功者と目される古今東西の代表とおぼしい面々が、したり顔に順繰りに影現するそれからまた、や／＼方面を転じて、智識、学問、道徳、

宗教、事業、發明、冒険等々の境地を巡礼することもある乗物はいつも『ただ念仏』の飛行機である。

こうしていろ／＼の人間界を見て廻ると、中には随分愛すべく、羨むべく、崇拜すべく、驚嘆すべく、各種各様の深刻な感興をそそつて、低廻去る能わすの概ある場面にぶつかることもあるが、とどのつまりは『それがなんだ、俺にはただ念仏がある』という合言葉で、飄々乎と、その境地を乗り切つて、次の境地に移り、そこでまた似たような経過を繰り返しては、また次の境地に転ずる。その都度々々の合言葉、墨句はいつも『ただ念仏』である。

私の飛行機『ただ念仏号』がめざすところは、畢竟『ただ念仏』の世界であつた。そのみが私の志願をのこりなく満たしてくれる世界であるからであらう。白道の上空はるか、層雲を衝いて『ただ念仏号』は飛翔する。

ここまで読んで来ると、なんだか痴人夢を説くといったような感を抱かれる方もあらう。……私自身にしてからがそうだから……が、単なる夢ばかりではない。現に私の今日までの生涯も、考えて見れば大体こんなものではないかと思ふ。

「即ち無明の闇を破す」、私の行方は闇である。ことに近く死と面と向つては、真黒闇の闇である。そこに、その

とき、忽然としてひらめく『ただ念仏』、私には巨人の腕にかざされた松明としか思われなかつた。実にこの閃こそ無明長夜の灯炬であり「即ち無明の闇を破す」はその光茫のとどく限りである。

私には『ただ念仏』がついて離れない。念仏だけでよさそうなものなのに、いつもたゞが冠ざるのがおかしい、おかしいというのがヘンなら不思議だが、実は不思議でもなんでもない。歎異鈔の文句から来ている。先ず第一には、第二章の——私の講演にはよく出てくる、殆んど口癖のようになつてゐる——『親鸞におきてはただ念仏して』の『ただ念仏』である。今一つは末尾に聖人の仰せとある。『よるずのこと、みなもて、そらごと、たわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします』の『ただ念仏』である。

どちらも『ただ念仏』である。ただとはほかのものではない、ただ一つという意味である。私について離れなかつたあの『ただ念仏』は、そも／＼どちらの『ただ念仏』であつたのだろうか。

はじめのほどは、私自身も、どつちのか解らないが『ただ念仏』にかわりはないから、どつちでもかまわない、おなじことだと思つていたが、よく／＼考えてみると、同じ

のように嗶然たらざるを得ない。

「我能く汝を護らん」の御約束の前には、「汝一心正念にして直ちに來れ」とある。この「一心正念にして直に來れ」というのが、本願招喚の勅命、即ち『ただ念仏』と全く同義である。謂わば、一心は「た」であり、正念は、「だ」である。直來は「念仏」である。一心正念直來は、『ただ念仏』の翻譯と見られる。

ついでに「直來」の訓詁について一言して置く。直來を直に來れ、と読むべきは言うまでもないことであるが、放浪の子が故郷に帰つて來る日を待ちかねる母の心に譬えれば、直來に、スグキテオクレヨと仮名をふることも許されよう。

あゝ、「一心正念直來」「ただ念仏」！この外に何がある。前に私は、もし生きたら、私の全身心を呑みこんだ怪物、ではない、歎異鈔のところ／＼について、有縁の人と語りたいとの、最後に只一つ残された念願を打ち明けた。だのに幸いに生きながらえて、今その念願を果そうとする、呆れたことにはなんにもない、綺麗さつぱりとなんにもない。おかしい譬だが、鷲に油揚をさらわれた野呂馬のようになんにもない。たつた一つ、依然としてあるのは、『ただ念仏』だけである。

あの当時、あの勢をもつて迫つた歎異鈔、特にその第九

念仏でも、これをあてがう方面の如何によつて、多少その趣を異にする。八面玲瓏とは云いながら、西からみると、東からみるとでは、富士の輪廓に幾分の相違があるようなもの。

第二章の『ただ念仏』は、師が手ずから弟子に授ける巻物一卷である。念仏の奥義がこれにしたためてある。末尾の『ただ念仏』は、その奥義に精通した弟子が、念仏の正味を噛みしめて、玉石混淆を嫌つて、他のあらゆる似而非者をはねのける篩である。

してみると、さきの闇中に閃いた『ただ念仏』は、巻物一卷の『ただ念仏』であり、信仰を抜きにした人生の諸相を『それがなんだ、俺にはただ念仏がある』の掛声で、飛び越え／＼した、あの『ただ念仏』は、要するに篩の『ただ念仏』であつたのである。

煩惱の犬は追えども去らず、涅槃の月は招けども来らずとはよく聞くことであるが、私の『ただ念仏』はそうでない。追えども去らぬ煩惱の持主の私に、招かざれどもつきについて毬のように離れようとしないのである。随時、随处、念頭に浮かぶのである。神祕の兜をさきかけて、湖畔に佇む八重垣姫を繞つて、点々として燃え出でる狐火のように。私はここに袖をとらえて離さぬという攝取不捨の利益「我能く汝を護らん」という御約束の効を体感して、今更

章後半の如きは、未だ曾て覚えぬ迫力を逞しくして「いそぎ浄土へまいりたき心のなくて」、「死なんずるやらんと心細く」、「苦惱の旧里はすてがたく」、「力なくしておわるとき」、「いよ／＼大悲大願はたのもしく」など、言々句々、私の一呼一吸の感があつたのに、だのに、今は『ただ念仏』ばかりとは！

が、考えてみると別に不思議はない。実はすでにあの當時、それからそれと思ひ浮んだ文言も、口の中で誦するにしたがつて、片つ端からすく『ただ念仏』『ただ念仏』に還元されたのであつた。だから歎異鈔全体は、要するに徹頭徹尾『ただ念仏』の連鎖に過ぎないのであつた。

わざ／＼岡山から見舞にみえた信友に、半ば遺言の意味をこめてこの趣を話したことを覚えてゐる。

そうだ！『ただ念仏』は、源であると同時に海であるのだ。独り歎異鈔には限らない。なんでもかんでも、真宗一切の権威ある文献は、皆ここに発起し、皆ここに帰入するのである。今死ぬという矢先に、長々しい文句や、こみ入つた筋道がわからなくてはいけない、では間に合わない。これだけは心得おくべしなど、条件がついてはやりきれない。『ただ念仏』の一つにおさまればこそほんに「たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなきよ」である。その『ただ念仏』がぼつかり念頭に浮ぶ。それがそのま

ま如来廻向の念仏ではないか。それがそのまま「行者のためには非行非善」としての念仏ではないか。それがそのまま「念仏申さんとおもいたつ心」ではないか。そしてこのころこそ、信的生活の始中終を貫く、常住不壞の生命であるのだ。

『ただ念仏』から連想してか、御文で聞きなれた「ただ白骨のみぞのこれり」という文句に想到する。更にその語路に合わせて「ただ念仏のみぞのこれり」と、くちずさむ信ある人の臨終の或刹那には、有つてもいゝ美望に値する転回だ。「ただ念仏のみぞのこれり」、さてその次に来るものは「速に無量光明土に到る」の大団円である。

記念号読後感

柳 瀬 留 治

いま池山先生の記念号を息もつかず読みました。嬉しさのあまり読後の感慨を記してお便りに致します。

先生の生きた体験からの迸り出る歎異鈔のお話、それは

池山先生の追憶

数え年六才で小学校に上つて以来、大学を出るまでの学生時代から、今古稀を三四年も過ぎかける年までの生涯に先生とお呼び申し上げる関係のお方の数は相当数に上るが其中で、何としても一番頭の下る、しかもなつかしい温情を感じる先生は、池山先生である。

その池山先生が入寂せられてから、いつの間やら数えて二十三年にもなるとは、時の流れの速さに、今更ながら驚くのである。

それにつけても、現在もう老人仲間にならるる今の自分が、若くして教室で教えを受けた当時の池山先生を追憶する時、三十代の先生が、よくもあんなに大成して居られたものと、感嘆せざるを得ない。白髪一本無く、漆黒の頭髪やお髭をもつて居られたので、爺さん臭い老人に見えた筈はないのだが、唯もうまるで段違いと云うか、桁違いと云うか、まあそんな感じで、血気にはやる旧制高校時代の吾々も、何としても頭があがらなかつた。とは云つても、

私には初めて先生の御信仰に接する気がし有難く尊く拝読し、そしてお人柄の現れているのに驚きました。前にも求道会館で常観先生のお口添えで先生のお話を承つたのですが、私の未熟な頃なので深く深い御信仰が判らず単に記憶にしか残つて居りません。

御令嗣、寿夫様の犬の話を拝読し、御父先生のお姿が躍如として出ていて、仏に遇つたような有難さ嬉しさで一ぱいです。

犬とりに首を荒縄で縛られて引かれて行くお宅のテ、その後について立派な髻を蓄えた先生が、念仏を唱えながら歩かれるお姿、首に繩を付けられているのが犬か、先生御自身か、先生が彼此等しく業繫に曳かれてゆく心となり、念仏を唱えながら後に付いて行かれる。何と有難く尊いお姿であろうか、これぞ聖人のお姿であり、我々に示された大きな哲示だと思われ、感慨に咽びながら読ませて頂いた次第です。

萩の蔭にねそべっている犬に「どうだ、テル、うちの萩はきれいだらう」と仰言つたという。全く菩薩の園林遊行のお心ではあるまいか。そして大きな詩でもある。

萩萩につぎて咲き出し白萩の澄みて清しき花も散りにき

永 井 一 夫

怖れて、敬して遠ざかる様な状態ではなく、その無限の温情の中には、いつでも飛び込んで行けたが、この先生に申しわけをしなければならん様な不始末をすることが、何とも心苦しくてたまらなかつたものである。

それでいて先生の方はついそ一度も教室で荒い言葉を出されるでもなく、いつも温顔に笑みをたたえて対せられたこんな先生はめつたにない。筆者なども年限だけは恐らくは池山先生より以上の教壇生活をして居るが、こんな年になつても、先生の爪の垢ほどの教師にもなれないのである。酒井佐保校長が、六高から三高の校長に転じて行かれる時、岡山に残して行く子供を池山先生に托して行かれたのは、流石に目が高い。

先生は何処で、どんな風にして独逸語を勉強せられたか知らないが、其語学力は相当高度のものであつた様だ。大学のドイツ文学科を出たドイツ語の先生の幾人かにも筆者

は巡り会つて居るが、池山先生に比べると問題にならない人が多いのである。この翻譯がまたすこぶる名調子であつた。先生は若くして社会運動に身を投ぜられた時代もあつた様だが、一面また演劇方面の造詣も大変深かつた様で、歌舞伎と、西洋劇の対比などをせられて、一入訳文に錦上花を添えられたものである。

先生にも奥さんにも、随分可愛がつて頂いた筆者ではあるが、何一つ先生の弟子らしい足跡も残し得ないのは、まことに慚愧の到りである。唯先生追慕の念に於いては人後

先師の御前に

先生の御在世中御苦勞をかけた私も、お蔭様で目を覚まさしていただきました。先生のいつもおつしやつた時節到来とはこの事であつたと感激しております。

忘れもしませぬ、丁度四年前の文化の日、洛西、苔寺の

に落ちない積りであるが、それにしても、六高会の席上などで凡そ先生の教えを受けた程の人々は、何れの他の先生の事よりも、より多く池山先生の事を語り合うのが常である。筆者としては、思ひ出は数限りなくあるが、私事で紙面を費すのも如何と思うので、本稿はこれ位にするが、先生に直接教えを受けた者は年々減滅して行きつゝあるかと思ふと何とも淋しい極みである。

昭和卅五年十月廿日

草 す。

北岡行男

傍、淨住寺における先生の追悼会の席上でありました。先生の御霊前に伏して法悦の涙に咽んだ私でありました。こんなこと申上げずとも、先生はお浄土から御覽下さつて、とつくに御承知のことと思ひます。否、あの時、先生の御

靈魂は鬚髯と御飛来になつて、目の辺りお喜び下さつたこととありますが、今日慈光誌上、先生の追悼号を通して、改めてお礼申上げたいのです。

先生の御在世中、私はまことに不肖の弟子でありました如何に先生に、やるせない、もどかしい思いをおさせしたことだらうと憶い出す毎に汗顔して居ります。しづとい鈍重な私にも、時節到来して、如来様のお慈悲が徹到いたしました。長い暗い夜が明けました。今まで握りしめていた拳がゆるんで、春の潮が身内に満ち溢れる思いでありました。

其後四年、家庭的に、対世間的に、心の内に色々な試みに会いました。嵐にも雨にも遭いました。煩惱は前にも増して熾んでありますが、ありがたいことに、いつも一脉の温気が、どこからともなく通うてきて、私の心を温められます。一陣の涼風が吹いてきて、心の鬱熱を散らされます喜びにつけ、悲しみにつけ、お念仏が涌いて下さるのです。先生が何時もおつしやつた通り「念仏は力である」ことを如実に、泌々と体験しております。こんな身にして頂いたのは「久遠このかた子ゆえの廻向、わたし一人をかた思ひ」下された結果のお慈悲が、私の底まで到りとどいて下された結果であります。又ひとえに、先生御在世中、長年お育ていただいたお蔭でありますし、先生の御遺徳が

花田兄を通じて、慈光誌上に於いて私を補備教育下された賜であります。更に近くはあの夜、花田兄が、心筋障害の宿痾をかえりみず、捨身の熱情を以て、深更に至るまで、私一人のために、懇々とお念仏の心髓を説いて、私の腹底に蟠つていた雑念をすつかり、払拭してくれたお蔭であります。

又、榊原法兄が毎年継続して先生の追悼会を勤めて下さり、先生を中心としたこよなき法の雰囲気「阿弥陀風呂」をお涌かし下さつた賜であります。

追悼席上、白井先生のお育て、城君の純情による触発等の御恩も決して忘れておりません。

すべては如来様のお手廻しと、ただ伏して嬉し涙に咽ぶのみであります。

多年憧憬れた、目に見えぬ力と結ばれた私の仕合せ、まことに不思議の宿縁を慶ばすにはおられません。

老来益々煩惱しげき自性、惻々と迫る無常感は変わりませぬが、先生の御遺訓を体して「ただ念仏」の一道を、力強く、たのしく、のどかに歩ませて頂く事を有難く感謝しております。

檜舞台に呼びあげられて

福 本 慶 子

私はまことに横着者で。仏前に合掌することすら少い日を送っています。しかし、阿弥陀仏は、私のために願を建て、私を呼びつづけて下さることを気付かせて頂いてお念仏させてもらえることは何とありがたいことと、しみじみ思います。

先日、花田先生から、池山先生の思い出を書くようにとお葉書を頂きました。その時、何故か、蓮如上人御一代聞書にある、勤修寺村の道德が、正月一日、蓮如上人の御前へ上つた時

「道德いくつになるぞ、道德念仏申さるべし」

と仰言つたお話を思い出し、自分の自頃の横着と、うかうか過した幾年月が思い出されるのであります。

又最近、実家の弟の転勤で名古屋に転住した母からの第一信に「一度名古屋に来て、一道会館へお参りする道案内をしてくれるように」とありました。これも慈光誌を母が読まして頂いている有難い御縁からであります。一日、母と共に日曜講話にまいりました。その時も、原橋の御催促がありました。そして同じように道德の話が思い出され

胸つまる思いがいたしました。

今また何か書こうとして、三度、その思いにせまりながら、聖典を拝読しました。

「勤修寺村の道德、明応三年正月一日に、御前へまいりたるに、蓮如上人、仰せられせうろう。道德はいくつになるぞ。道德念仏申さるべし。自力の念仏というは、念仏おくもうして、仏にまいらせ、この申したる功德にて、仏のたすけ給わんするようにおもうて称うるなり。

他力というは、弥陀をたのむ一念おこるとき、やがて御たすけにあずかるなり。そののち念仏申すは、御たすけありたる、ありがたさ、ありがたさと思ふころをよろこびて南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と申すばかりなり。されば他力とは、他力というころなり。この一念臨終までとおりに往生するなりと、仰せせうろうなり」

勤修寺村の道德は、私のような横着者ではなかつたでしょう。でも阿弥陀仏の御慈悲が善知識を通じて、機に即し、時に応じて、お呼びつづけ下さり、念仏を御催促下さつて喜ばせて頂く凡夫にとつて、道德へのお話は私への御言葉

でございます。私にとつて、どんな機会にでも、池山先生の御在世の頃を思うことは、「ただ念仏」の御催促であります。

私が池山先生の御ことを始めて聞いたのは、祖母からでございます。芦屋の仏教会館へお参りした祖母が

「有難いお話やつた。甲南の先生で、お坊さんじゃない。そうやが、お前にも一度きかせたい」といつていました。その頃私は、高等師範の受験勉強で

机にしがみついています。祖母の言葉はよく覚えています。私が浄土真宗の講話をきき始めたのは女学校の四年の夏でした。祖母と一緒にお参りしました。よく世間では仏教は若い者の寄りつき難いところのように申しますが、私はそんな話を聞くと、今でも不思議な気がしますが、自分にそんな感じの経験がなかつたからだと思います。芦屋の仏教会館はその点ありがたい所でした。明るい雰囲気の中で梅原真隆、佐藤義詮などといった先生方が、上手なお話ぶりで、若い者が耳を傾けるきつかけをお作り下さいました。

私が本気でお話をきくようになってから、奈良の浄教寺で一度、池山先生のお話をうかがつた後、祖母と一緒に芦屋で先生の御講話に参りました。その時、お話が終ると壇上から「その人」といつて手まねきして、講壇の端まで

出て来られました。私のことだとわかつてびつくりしましたが、そのお優しいお姿と、深いお目を覚えています。

「一心正念直来」「おねがだからすぐ来ておくれよ」とよませて頂く毎に、漢文からうけるきびしさをそのお目に、「すぐ来ておくれよ」のお慈悲のやさしさをその時のお姿に思い浮べます。

その後花田先生につれられて、蓮華谷のお宅に伺つた時「あゝこの人なんだよ」と先日の芦屋の夜のことをお話になつていたとみえて、友子夫人に紹介して下さいました。

その後お宅へは度々うかがつて、先生や御家族の方々に随分お世話になりました。又小娘であつた私は先生から、よくからかわれました。

講話が楽友会館であつた或日、一晚泊つてゆくようにと仰言つてお伴して行きました時「今日は大学生を主にしてお話をしたから女の人には少しむつかしいでしたか」と仰言るので「いゝえ、よく解りました」と申し上げましたらお笑いになり、わざ／＼、友子夫人を呼ばれて「よく解つたそうだよ」と言つて、お二人でお笑いになりました。こんなことも先生がお元氣だつた頃のたのしい思い出です。

私はこんな雰囲気の中で、御著『仏と人』におさめられている数々のお話をホッリ／＼とうかがいました。本當にこの世にあるべくもないようなありがたい日々であ

りました。若かつた私には解りませんでした。先生は人生の色々なお悲しみの中で、あゝした御法悦の生活を送つて居られたのでございます。

先生を思うことは、私にとつて、開法の「檜舞台に呼びあげられる」ことに他ならないのです。先生の御目が、慈悲と慈愛をこめて「いくつになつた」「ただ念仏だね」と仰言います。

その頃の私の手帳に、先生の板書を写して、中央に「私の姿」(信仰)と書き、それを取りまいて右側に

一章、三章、四章、五章、六章、七章、八章

九章(入信の裏門)『私の姿』(信仰)

二章(入信の正門)

十章、十一章、十二章、十三章、……十八章、

と書いた歎異抄の構成図などもインキの色が変つていて、過ぎた年月が思われます。

昭和九年一月三日と記して

念仏を主とせばや三ヶ日

白道に手をつなぎたる三日かな

と先生の句を書きとめています。始めの句は書にして頂いて毎年正月に味わつて頂いています。

その頃「ありそなこと」というチョコケの小説の参議ストリークさんのお話も伺いました。世の常ならぬこと、人の

池山先生の憶い出

——歎異抄第六章を通して

人生は広く渡るべきか、深く渡るべきか、勿論広く深く渡るに越した事はないが、重点は飽くまで、深くと云う処に置くべきでなからうか。『埋木は下を流るる水に触れ』吾々は吾々に生命を与えたものに至順に生きる時、天地の大生命に触れるのであろう。

光陰矢の如しと云う。アツと云う間に今年も紅葉の秋が近づいて来たが、京都の浄住寺様は自然の美に恵まれていると謂われ、さぞかし紅葉の時節は一入その偉観を添える事であらう。池山先生の追悼会が第十七回忌から毎年この浄住寺で歳毎に盛大に営まれ、同信の法友が相集つて、先生を慕い、懐旧の情を温めて居られる事は、慈光誌上で拝読させて貰つているが、筑後柳川の浪人、小生は、遠隔と経路上の都合で未だに馳せ参ずる機会が来ない事を残念に思つている。

何時かの一道会の記に、信国さんが、池山先生の述懐として「念仏者は名を求めてはならぬ。無名ということが大切である」と云う言葉を深く味つて居られる事が戴つてい

心の常ならぬこととして、何となく伺つて居りましたが、その頃から、二十幾年「ありそなこと」は私の外に、内に惨怛たる悔いを残して過ぎました。そして、「ありそなこと」の連続の道を、今日もまた歩む外はないので御座います。「兎毛のさきにいる塵ばかりも、造る罪の宿業にあらずということあることなし」であり「さればよきこともあしきことも業報にさしまかせて、ひとえに本願をたのみまいらす」他に道もない、業報の身であります。

まことあることなき心をもつて、善悪を云々する虚仮の日暮し、「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよらすの」とみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏の女ぞまことにておわします」

なすすべもなく、先生の御目を仰ぎ、お念仏を共にさせて頂きます。先生の深いお目はいつでも私を「檜舞台に呼びあげて」下さる深くきびしいお目であり、「すぐきておくれよ」の御意訳は、共にお念仏して下さるおやさしい還相廻向のお姿であります。

島

仁

た。吾々は日常生活に於いて、どれほど名に執われ、利に惑わされているか分らない。結局、名利と愛慾が吾々凡夫のすべてであると云つてよい。否、そういう存在が凡夫と名づけられる所以であらう。凡夫の生活をし乍ら、名利を超えて生きられる道が念仏道でなからうか。吾等は名と利とを離れ得ざる限り、その奴隷となり、その前に頭を下げざるを得ない。そこで歎異抄第六章が、至宝、金塊の如き光を放つてくる。

十年一昔と云うが、思いは遠く三十年の昔にさかのぼる先生は昭和四年に甲南高校から大谷大学にお出でになつた私の予科二年の時である。当時谷大では、竜大と共に学問の自由を叫んでストライキの最中だつたと思う。僕も一役買つて随分熱中したものと見え、先生の存在などおぼろげに感ずる位だつたというのが事実である。真宗の信仰が学園樹立の精神であるべきはずなのに。今にして思えば、先生は困つた学校に来たものだ、独りつぶやいていられた

事だろう。而も一方に於いて教授の中には教権とオウソドックスの学者が幅を利かせて威張り散らしていた。そうした環境の中から生れたものが、歎異抄第六章を味読された「麗容の聖人」の一文であろう事は、吾等の想像に難くない。歎異抄第六章は申すまでもなく「親鸞弟子一人も持たず候」の一条である。世の中には偉い人が随分沢山いる。一般世間は勿論、宗教界にも。そうした世間にあつて、弟子一人も持たずの自覚は仲々出てくるものではない。先生は聖人のこの言葉を通して、何とも言えない崇高さと恬淡さとを感得して居られる。「槍の権佐は伊達者でござる。油壺から出たよな男、しんとんとろりと見ほれる男」、これは、京都聖鸞寮、閉寮記念、式宴で先生の発表せられた一句であると憶えている。「弟子一人も持たず」と仰せられる聖人の麗容さを先生がそこになぞらえられたものであつた。爾来私は、宗教人の宴会の席などには何時もこの句を余興に、都々逸調にして歌い、先生を忍んだものである。歎異抄第六章と銘打つて。

先生の独乙語はこれまた先生独特のものであつた。江戸ッ児育ちの歯切れのよさと、さびのある声で、満面に笑を浮かべながら、さも愉快そうに語り出されるお姿は、今なお印象的である。吾々は知らず識らずの間に先生の人格的

感化を受けた事は言うまでもない。

先生は嘗て、誰に言うともなく、谷大で信仰運動を起したらどうかと暗示せられた事があつた。丁度その頃は稲津先生も学部の教授をして居られ、好いチャンスであつたので二三の友と相謀り、計画中だつたが、何かの経緯で沙汰やみとなつてしまつた。先生はその時、氣概のない、甲斐性なしの学生達だと内心お叱りになつていられたことと想像する。この時分、洛西の蓮華谷の先生のお宅へ、聖鸞寮の友と三三五五、連れだつてお訪ねしたものだつた。昭和七・八年頃だつたらうか。先生というより、親爺と云つた方が、その頃の実感である。

爾後、谷大を去つた私は、先生と接する機会が少くなるのが何より悲しかつた。郷里では実兄を喪い、人生の苦盃をいやと云う程嘗めさせられた。否この逆境が却つて私を内省へと深入りさせ、自己のみにくさ、無能力さを泌々と味わわさして呉れた。その苦惱のドン底、人生の曲り角にあつて、在りし日の先生のお諭しが、常に思い出されて、蔭に陽に、声なき声としてひびき、再起の勇気を奮いたたせて下さつて居る。何と御礼の申しようもない。噫々。

示現滅度拯濟無極

今年は私にとつて非常に想出の深い年であります。

先ず私自身が数え年の五十七となり、亡き父の年を迎え四月一日はその命日として感慨も一入でありました。

次に昨年秋に親しくお目にかゝり得て、永年の願いが叶い、これから慈教を長く蒙りたいと願つて居りました足利浄田老師が、五月廿五日に亡くなられました。

更に、九月卅日には、私の岡山の学生時代に、親鸞会の親ともなつて下さつた、岡山医大生理学の故・生沼曹六教授の十七回忌でありました。何時も微笑をたたえられた慈顔があり／＼と眼前に浮び、病軀とて御仏前に馳せ参じ得ないことをこと慚愧いたしました。

そしてこの十一月八日には池山先生の正忌日をお迎え申したのであります。十月末の日曜日の一道会も有縁の方々と共に、一期一会の聖会を頂きました……。

こうしたことの続きましたにつけ、大経序分の「滅度を示現して、拯濟すること極り無し」

の、和尊の入涅槃の相を説かれた聖句が、異様な感動をもつて浮び出ては、大いにうなずかされて居ります。こ

花田正夫

れは申すまでもなく、

「仏が地上に姿を滅し給うて、それを期として、いよいよおすくい下さることが極りが無くまします」

という意味であります。このことは私共の常識からは判断の出来ぬことであります。何時までも長生きして頂いてこそおすくいも頂けるのに、亡くなられては、紙薦の糸の切れたも同然で、それでおしまいになるのが、私共の常識であります。ところがこの普通の常識を越えて、死が障りとならず、かえつてそれがよい御縁と転じて、どこまでも私共の救済を成就して下さることを説かれて居るのであります。

さて不思議にも、このことがこのたびは事実として、否はかなく結んでは消える単なる事実でなく、そのまま永遠の真実として、いよいよ心に沁み、身に徹して来るのであります。

このことについて、更に私の感動を強くされますのは、法華経の寿量品にある、良医の譬喩であります。

「昔、或所に、非常に聰明で、薬方にも通じた良医がありました。その人の子供は、十、廿、乃至、百歳でありました。或時、父が遠い他国に旅行した留守に、子等が誤つて毒を飲み、毒のために悶絶し、宛転して居りました。

そこへ父が帰つて来ましたので、子等は皆大いに歎び迎え、私共は愚痴なばかりに誤つて毒薬を飲みました。どうか早く治療して生命をおたすけ下さいと願いました。

父なる医師は、色々の書物をしらべて、色も香も味もすべてすぐれた薬草を求めて、これを調合して、子等に与えました。そして、

「この良薬は、色、香、味もよく、何もかもそなわつているから、汝等はいやくこれを服用して、苦悩を除いて、わずらいをなくせよ」

と父が勧めますと、子等の中で、また毒が劇しくなくて心をついていない者は、この良薬の、色、香、味のよいのを見て、これを服用して病気がすっかり癒えました。

ところがすでに毒が全身に廻つて、心を喪失している者は、父に病を治して下さいと云いながら、しかもその薬も眼の前に与えられていても、一向に服用しようとしませぬ、これというの、毒気が深く入つて、本心を喪失しているからであります。そしてこの良薬を見ても、こんなものはつもらぬ、病気がなおるものかと思ひこんでいるので

父が旅先で若しものことがあつたら、その時こそは、この薬をきつとのんでおくれよとのことであつた。これ程に言つて下さる人がまたあるだろうか、これは父の生命に賭けての御遺言であつた」

と気づき、この薬の色も香も味もすべてすぐれていることも知ればじめて、これを服用しますと、重い毒の病がすっかり癒えてしまいました。

父は旅先にあつて、子等のことごとくが服薬して、すでに全治したと伝え聞くと、早速旅から帰つて、子等の前に姿を現わしました。子等も亦非常に喜び迎えました」とあります。

經典には、ここをさらに懇切に説かれました

「若し親尊が久しく世に住り給うならば、徳の薄い人々は仏は何時までも居られるから大丈夫だとおこたりの心をおこし、心の貧しく賤しい身を恥じることもなく、只五欲をむさぼり、自分勝手な妄念妄想ばかりを續けて、仏に遭い難いことも思はず、恭敬の心もなく、手ですることは足とするようになつてしまふであらう。こんなことでは徳の薄い人達は仏にお遭いすることも、お遭いしようという心さえも失つて、はてしなく迷うて行くであらう。ここに、私は八十年の御生命を捨てられるのである。そこで初めて愚痴な者にも驚きの心がおこり、仏を敬慕、渴仰するよう

あります。

そこで、父は病苦にせめられながらも一向に薬を飲もうとしないこの哀れな子等を見て、色々思案をめぐらした末一つの方便を思ひつきました。先ず子等を集めて

「自分はもう老衰して、死も間近いことを知つている。それについて、この薬を今ここに拵めておくから、どうかはやく飲んでおくれ。必ず病は治るから」

と告げて、遠い他国へ旅立ちました。そして程なく使者を遣わして、旅先で父が急死したと、告げさせました。

子等はこの悲報を聞いて大いに憂い悩んで、念いますに「もし父さえ在まれば、私共を慈しみ慰んで、能く救ひ護つて下さるであらうのに、今は私共を捨てて、遠い他国で亡くなられたのだ。これで本心に独りぼつちになつてしまつた、もう地上でたのみにする人は無くなつた……」

と、悲歎やるかたなく、ただ涙にくれて、一心に父を慕う心がつのるばかりでありました。しかし、この身を裂かれるばかりの悲哀の底から、不思議にも子等の心がめざめはじめて、だん／＼と迷いの雲が払われて参りました。

「嗚呼、二度ともう父に会うことは出来ないが、父が常に繰り返し／＼、そして旅立つ間際まで、拜むようにして言い遺されたことは、薬をどうかのんでおくれ、病気の心配はいらぬ、これをのみさえすれば必ず治るから。老年の

になるであらう。かくて人々の心がやわらぎ、すなおに信伏して、一心に仏を見奉ろうという心が發起され、身命もかえりみぬとなる時、私は衆僧とともにその前に現われ給うのである。仏の国は、たといこの世が劫火に焼けようと、何時も安穩であつて、天人が充滿している、仏が入滅の相を示されるのは、愚鈍な衆生を大悲し給う至心のあらわれである……」

とあります。煩惱の毒に全身がしびれきつて、心を喪失している私の姿が、そのまゝここに写し出されているのであります。

法然聖人の観無量寿経の御釈の中に、下品の悪機、十悪五逆の衆生の臨終に、念仏にたすけられる有様を説かれてありますところで「この品、最も要なり、すこぶる我等が分に相当せり」と註をしていられます。このことは聖人の御心に深刻に印せられたと見えます。生誕、十悪の法然愚痴の法然房と名告られました。私はこの良医の譬喻に、「喪心の死骸」としての我等が分を知らされますと共に、そういう重病人で、自分の力では、永遠にめざめることのない私のために「滅度を示現」して下さる大悲に感泣せしめられるのであります。

親尊に常随した阿難尊者は、よく聞き、よく覚えて、仏弟子中多聞第一と称えられました。未だ心眼の開けぬ

ちに、仏の御入滅にあい、闇夜に燈火を失つたも同然で、大悲歎におちましたが、機縁ようやく熟して、大迦葉尊者の大喝をうけて、たちまち仏心に徹したと伝えられます。

さて、良薬について、聖徳太子は、法華一仏乗であると言仰されました。即ち、老少善悪をえらばず、あらゆる衆生を残らず乗せて、さとの彼岸にとどけて下さる仏心のまことであるとの仰せであります。

親鸞聖人は、法華一仏乗のまことは、そのまま、弥陀の誓願の一仏乗であると説破されたのであります。弥陀の誓願の船こそ、老少善悪のへだたなく、必ず往生成仏せしめて下さると体解せられ、その本願成就の南無阿弥陀仏の名号を、本願醍醐の好妙としてお勧め下され、難治の三病、難化の三機、必ず治す、と信証して下さったのであります。「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と聞信して下さったのであります。

さて、池山先生の御生涯を通じての常持語は「ただ念仏して」の一語につきるのであります。そして、点滴の岩を穿つに似て、先生に接する程の人は皆、このことを深く心に刻み込まれていたのであります。而も先生の内には何時も「阿弥陀湯」が、程よい加減に沸いていて、世上の風

無慚無愧のこの身に、まことの心はなけれども、弥陀の廻向の御名なれば功德は十方にみみちたまうまことなき身の上に恵まれて来る道であります。そのことのために、先生は滅度を示現して下されたのであります。

一道忌に思う

庭の高木に百舌が鳴き、やがて鶉の音がして、秋の深まるにつけて、毎年のように「一道忌」が思い出される。心急ぐ百舌の声澄み徹つた鶉の囀りは、秋へのいざないである。これとても、怠惰な私にとつては全く、花田兄の「慈光」が呼びかけである。

書架にあつて、日頃は折々脊文字を見るままの、「呼子鳥」を出して散読する。奇しくも今日は、十月二十二日、わが池山先生が、遂に不起の御病床となられた日である。そして亡くなられた御年が六十七だということだから、考えて見ると、私は先生五十一歳の齢からお育てに預かつており、最後にお目にかかったのが六十四歳、そして「入出

の冷たさに震える者も、煩惱の塵に垢まみれになつた身も何時も温められ、洗われて居りました。そこで或程度温められるなり、洗われるなりすると、すぐさまお膝元を飛び出してしまふのであります。又しても、冷たさ、穢なさに行き詰つては、先生をお訪ねすると云う風でありました。それでどうにかこうにかこの世の渡りは出来て来たのであります。ですが、こうした時、先生は勿然として世を去り給うたのであります。

さあ、こうなると、お風呂のことは先生におあずけをしいた私共は、はたと当惑したのであります。寒さと塵埃にまみれたまま、「親いませば、〜と愚痴に明け暮れ、先生をもとめる心が切になつて参るのであります。然し何処をどう彷徨うて見ても、私共の心は満たされないのであります。そこに、ゆくりなくも、

釈迦如来がくれまして二千余年になりたまう

正像の二時はおわりにき、如来の遺弟悲泣せよ

の聖人のみ心の片端ばかりにふれますと共に

縦令一生造悪の衆生引接のためにとて、

称我名字と願じつつ、若く生者とちかいたり

の、和尊の出世の本意こそ、先生の唯一無二の御遺言であつたと知らされて、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらす、念仏の白道がひらけて参るのであります。その道は

一期一会の先生の廿三回の御正忌をむかえ、悲喜の涙の中から、以上のようなことを気づかせて頂き、不滅の先生のお導きをあたらしく蒙りました次第であります。

玉尾延忠

二門偈頌の拙訳『芬陀利華』の御校閲を頂いたのが五十八歳の御時である。三十年隔つている私は、今や先生のその年齢に垂んとしているのに、寔に愧ずかしい極みである。このたびの廿三回忌記念号を通読して、特に御令息寿夫氏の「萩と犬と」の随想に深い感興を覚え、紙背に窺える心情の高さを切に感銘した。

「紅梅を見せでわかるる恨かな」と、御父先生の認められた色紙を饞に、再び雨米に渡られたが、帰国して今は高知に住まわれ、恐らく既に還暦を越していられるであろう氏の思い出と共に、現在の心境がおのずから象徴的に語られていて、説明と理屈抜きに、含蓄の深い、薫り高い詞章

心憎きまでの表現と思われてならぬのである。

「萩が好き」だつた父の愛犬テルと萩とにからまる思ひ出が語られて、最後に「どうだテル、うちの萩はきれいだろう」と明るく父の声を思い起し、「今年はずつかり萩を張つた」「萩の一株」を「いいなあ」と思い、そのたびに「いいなあ」という父の声を心にきき、「どうです、うちの萩もきれいでしよう」と話しかけていられるのである。

然るに私は、この齡になつて、心の有りように何があるだろうか、「先生、うちの〇〇も、きれいでしよう」と申上げられる何があるかと、まことに慚愧の次第である。

只々先生の人徳に感嘆するばかり、否、徳としか思えない先生の風格を讃嘆するばかりである。

先生のお言葉、その文章は随分むつかしい表記であるに抱らず、豪も理屈や、教えがましく響かないのが不思議である。外でもない。先生は全く「絶対他力と体験」を告白せられ、人をして信仰を喚起せずんば已まない剛い気魄を以て、廻心の一念を吐露せられたのである。そして「白道の風」等「遊煩悩林現神道」裡の風光は、側目には如来と見えたとである。

を渡ると、女を下ろしました旅足を急ぐ。暫く行つてから一人の僧が「さつきの女はきれいだったのう」と言うのと、他の僧「お前はまた先の女を負うているのう」と応返するという筋である。そんなとき私には屁理屈がつくのが願みで自分ながらやり切れない。

大橋を過ぎて街に入ると、とあるレストランで何だつたか温いものを御招待して御宅に帰り着く。それから家族みなさんと共に、仏壇（三面金屏風の中央に御尊像を懸けてある）の前で、——たしか奥様のお先まいりで——歎異鈔を斉読した。終ると暖い紅茶が出された。

家族揃つて仏前で歎異鈔を拝読し、後で茶菓を出す——この行事を私も真似て、時たま折にふれてすることだが、もう子もある長男が唱和する声も耳に入つてくると、何とも言い難い哀歎交々である。

終りに、かつて追想録の一節に「歌は信仰の芸術的実践云々」と書いたものの果して、先生の「あふむけに仔犬ねころぶ日向かな」「ここはまたどうしたことで暖き」などのような、自然法爾の法悦味ゆたかな調詠があつただろうか。今更ノートを繰つてみても乏しく浅いものである。

斯く讀じ、かく仰ぎて、自らの至らざるを歎き悲しむにつけても『呼子鳥』の中で、今は亡き奥様、友子夫人が、「靈前に語る」お言葉に於て、御夫妻間の赤裸々なお姿を遺して下さつていられることは、後々の吾々に歎異鈔十三章の味わいをいよ／＼深く感嘗させて下さつていてありがたい。

序でに『呼子鳥』に収められた拙文追想録の一部を補遺する思ひ出を記しておこう。

即ち「昭和五年三月二十一日、京都紫野に先生を訪い、その夜先生御夫妻に伴われて祇園の桜を觀」ての帰途、四条の大橋を半ば通りかかつた頃、二人の舞妓とすれちがつた。先生は奥様の方へ向いて「きれいだなあ」と仰言つた。艶麗でなまめかしい舞妓姿、灯明かりに瑞々しくうら若い顔、先生には、丸山公園の桜花と同じように美しい存在だなあと思ふ。

折々家族や、親しい人と池山先生の思ひ出を語つて、この話を出すと、その後もの本で読んだ、つぎの話と比較するのが例のようである。

それは要約して——、二人の旅僧が大井川の岸まで辿りつくと、丁度そこに二人の女姓が、あまりの川水に当惑の体たらく、二人の旅僧は銘々にくだんの女を脊負つて川

あたたかき光となりて鳴る瀬の音夢が青める洲のあひだより

若萌えの庭にはかに疾き風柿の稚葉をしきりに散らす

朝のまの日ざしに向きて光満つ木したに幾日咲く石落の花

砂山に月のひかりは照らし来てながき影曳く妻の影吾の影

やうやくにひとつ心に至りけるわれら二人が二十年経て

歎異鈔誦しつ妻と吾がこゑのひとつなるとき生きのかなしさ

年賀はがきおくる師友に寄せて思ふ学びと生業と歌と宗教と

そして親しい歌友が

「自らにつぶやく如く又人に聞かする如く玉尾君批評す」と、こんな歌を呉れたりすると、せめてものおもいがする

法 信 抄

芳 躅 長 田 智 竜

小鳥たちに呼びかけた アシジの聖者
フランチェスコの優しい眼！

乞食の手を握りしめた大詩人
ツルゲエネフの大きな掌

六度目に日本渡航の初志を果した
盲目の僧鑑真の 永遠の微笑！

春の日永を 子供等と遊びくらし
野聖良寛の 手毬唄！

庶民と手をつないで救われて往つた
愚禿親鸞の たゞ念仏！

歴史にのこる足跡は
千万人の魂をひきつけずにおかない。

優しい眼と大きな掌と微笑と毛毬唄とたゞ念仏と
古徳に通ずるその人こそ、池山栄吉先生！

京都学生親鸞会の育ての親は
逝き給うてはや二十余年

子、慈光でおきかせ下さるのをたのしみにまつています。

滋賀県 園 輝 子

…御同行五人と佐々木の老母も一道会にお参り下さい
まして有難い御法事に会わせて頂き、榊原老師のお姿も拝
し有難う御座いました。…帰りに雨か降り始めましたの
で御挨拶もそこ〜で参道を下つて居りますと、うしろか
ら傘をさしかけて下さる方があるので、ふと振りかえりま
すと、白井先生でありました。誠に仏様が現われて下さつ
たかと、感激いたしました。

愛媛県 田 中 克 己

日一日、秋が深くなりますが、如何お過しですか。慈光
誌毎号御恵送下さいまして有難うございます。殊に今回の
は池山先生のなつかしい御面影に接して有難く存じまし
た。三十数年前、六高時代、この耳に聴いた先生のお声
が、今また耳もとによみがえるように覚えました。

私、当地では全く一人ポツチのような生活ですが、その
中に機縁が与えられるようです。何事も御計らいとお受け
して行きたいと存じます。

豊中市 城 一 雄

早いもので私が初めて一道会に出席しまして四年に
なります。その初め池山敏朗さんから「奄美出身の娘さん
を世話しているが、身寄りがないうえに肺部疾患で困つて

「絶対他力と体験」と、「信を行く旅人」と
「意訳歎異鈔」と「仏と人」の本どもは

大きな芭蕉の 真白い花から
こぼれおちた甘露のしずくである

師の抱擁力と ふかい学識とは
遺弟の耳に いまも快い念仏となつて訪れ

「そうだよ、その通りだよ、たゞ念仏だけよ」と
お写真が しずかに肯ずくごとくに。

富山県 長 谷 顕 性

秋もたけなわになりました。池山先生の二十三回忌には
参られないので、当日は家で三、五の道友と「ただ念仏し
て」のお言葉を味わって頂きました。又最後の御法語、
「えらいこつたよ、お念仏だけがのこる、ありがたいこつ
たよ」と仰言つていた慈言が身につまされました。

今、池山先生染筆の御名号をお送りいただきました。書
斎にかかげて仰いでおります。無の字が妙に「ただ念仏し
て」といつておられるように浮びあがってきます。

長野県 増 山 銀 治

高い山に雪の見える季節となりました。…池山先生の
御名号、御恵送下さいまして有難う御座いました。早速表
具屋へたのんで正月にかかけたいと思います。一道会の様

いる」とのことでした。その後、身寄りの叔母さんも貧しく
入院も出来ないの、奄美に帰ることになったが、健康が
旅行に堪え得るかどうか診察してくれとのこと、一応診
しましたが、大変悪化していて旅行出来る身ではありません
ん、また奄美に良い病院もありますので、こちらで入院
するほかにこの娘さんのたすかる道はないことを申しまし
た。

然し、米軍の軍政下の時、奄美を脱出したので移動証明
書が無いので、市役所でも、警察本部でもどうすることも
出来ないとのことでした。

その窮地にあつて、池山さんは「第三国人でさえ施療を
受けられるのだから、まして立派な日本人が受けられんこ
とは無い、土地の民生委員に相談して下さい」と申された
ので、勇気を出して交渉しますと、済生病院に収容して貰
い、九死に一生を得たのでした。今日ではその娘さんも立
派に肥つて見違える程です。

池山さんにどうして縁もゆかりもない娘さんをたすけた
のですかときくと「娘さんの性質が大変純真な処があつた
せいもあるが、私には大事な時に亡き父が出て来るのだが
この時も助けてやれよと父の声がした」とのことでした。
奄美出身の私としてこの度池山さんにお礼を申したかつた
のですが、その機を逸しました事は残念でした。

編集後記

秋晴れて、地に黄金の波をうたせ、在々所々に真赤な柿の実が眼をたのしませてくれる清澄の候となりました。私共も心のみのりを存分に頂きたいものと、毎年ながら自然の草木に教えられることであります。

さて十月卅日の一追会を記念して池山先生の六字名号の半切ものを、一追会でオフセツト刷が出来ました。榊原師の御腐心の賜であります。読者の方で御希望の方がありませんれば、慈光社なり、浄住寺様なりに御申出下さい。詳細は次号で申し上げます。名号の中に先生の全霊が躍動して居ります

△「ただ念仏」の池山先生の御原稿は、「仏と人」にもありますが、先生の御葬儀の日、会葬者の方々に印刷して渡されたものであります。大病中のまことに息づまるまでに切々とした信の体感録であります。但し先生もよく申されましたが「わたしの言うただ念仏は、そのまゝただ信心と通じるのです」ということを申し添えて、万

一の読み違えのありませぬようにと念じて居ります。

△北岡行男さんは、私と六高時代からの友であります。只今は御子様に北岡病院は譲られて、吉野の山深い無医村で診療所の生活が続けていられます。島仁さんは、谷大の学生として先生に接せられた方でありませぬ。御自坊にあつて、真面目な信の旅を続けていられます。福本慶子さんは、先生の甲南時代から御臨末まで親しく接しられた方でありませぬ。

△永井一夫様は六高の先輩であり、先生に親灸せられた方でありませぬ。玉尾延忠さんは郷里で開業医を続けていられます。

筆者の住所

札幌市南二条西十二丁目

永井一夫

奈良県吉野郡天川村南日裏、国保診療所

北岡行男

福岡県山門郡大和町島、仁業寺

島仁

京都市左京区北白川西平井町十六

福本慶子

愛媛県観音寺市古川

玉尾延忠

東京都渋谷区代々木本町七三一

柳瀬留治

御案内

毎月一、二、三日曜、一追会館、日曜例会
毎月廿四日午前 午後、教西寺、法話会

定価 一部 二十円(送共)

半年 百二十円(送共)

一年 二百四十円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市中種区千種町馬走三八

印刷人 本田 政雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番